

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★



Data

監督：阪本順治

出演：佐藤浩市／原田芳雄／筒井道

隆／キム・ガプス／チェ・イ

ルファ／ヤン・ウニョン

## 👁️👁️ みどころ

1973年8月8日、金大中（キム・デジュン）が東京のホテルから突然姿を消した。KCIA（韓国中央情報部）による「KT拉致・暗殺計画」が実行されたのだ。しかし、この5日後、金大中はソウルの自宅で目隠し、傷だらけの姿で発見された。佐藤浩市演ずる自衛官や原田芳雄演ずる新聞記者らが、事件に複雑に関係しながら、金大中事件の「真相」が描かれていく。大阪出身の若手監督阪本順治が、「金大中事件」を素材として、政治とKCIAのヤミの部分をも大胆に描いた話題作。必見の作品です。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### <金大中政権の終了と 政権の発足>

私が『KT』を観た2003年2月24日という日は、くしくも金大中（キム・デジュン）大統領の任期満了の日だ。国内的には大胆な規制緩和と金融改革を柱とした「経済改革」によって韓国経済をV字回復させて、「IMFの優等生」と言われ、また北朝鮮に対しては「太陽政策（対北包容政策）」を掲げて5年間の任期を全うした。金大中の時代が終わり、明日からは新しく盧武鉉（ノ・ムヒョン）大統領の政権が発足するわけだ。

こんな運命的な日にこの映画を観ることが出来た偶然の中で、改めて金大中が政治家として生きた激動の時代の韓国をいろいろと考えることができた。

### <2003年朝日ベストテン映画祭>

なぜ今『KT』を観たのか？ それは、2003年2月24日～3月2日までの間、「2003年朝日ベストテン映画祭」が開かれ、その中で『KT』の上映日が2月24日だったためだ。『KT』は、2001年12月から2002年11月までの間に関西の劇場で公

開された映画の中から、日本映画のトップに選ばれた作品だった。

2月24日は映画祭の初日だったため、授賞式があり、『KT』の監督阪本順治氏が挨拶をした。その中で彼は、

①なぜ「金大中暗殺拉致事件」というテーマを今映画化しようとしたのかを述べ、さらに

②多くの人が反対する中で、余計にやる気が大きくなっていったこと

③映画の製作中や上映中は、常に公安当局の目が光っていたこと

④授賞式の時などは「刺される」のではないかと本気で心配したこと

⑤今日の上映会にも、公安関係の人が来ているかもしれないこと

⑥韓国の映画人たちとこの映画をつくることができたことは自分にとって新しい、良い勉強になったこと

等々を、実に真実味のある語り口で述べた。実にいいスピーチだった。

こんな昔の事件、そして政治の裏の部分、ましてやKC I A（韓国中央情報部）（Korea Central Intelligence Agency）の暗躍ぶりを描く映画をつくることは非常に難しいうえ、大きな冒険、賭けであったことは確かだろう。

## <金大中という人物>

金大中の名前は日本では比較的名だ。1945年8月15日の日本敗戦、1948年韓国・北朝鮮成立、1950年6月25日朝鮮戦争勃発、1953年7月27日朝鮮戦争終了、という時代背景の下に、韓国の初代大統領であった李承晩政権は1960年に崩壊し、朴正熙による軍事クーデターを経て、朴正熙が1963年大統領に就任した。そして1967年には大統領に再選、1971年には3選された。しかし、1979年朴正熙大統領は暗殺され、全斗煥によるクーデターがおこり、1980年には全斗煥大統領が登場した。そして、1987年には盧泰愚大統領、1992年には金泳三大統領が登場した。

金大中が最初に大統領選挙に立候補したのは1971年であり、朴正熙大統領とその3選をめぐる争った時代。この選挙において金大中は、朴正熙陣営による買収・投票妨害・脅迫等、ありとあらゆる選挙妨害の中、果敢に闘い僅差で敗れたのだった。この1971年の大統領選挙後、この映画で描かれた1973年の拉致・暗殺事件をはじめとして、選挙違反による逮捕や、1976年の民主救国宣言への署名を理由とする逮捕、死刑判決等、金大中には最大の危機の時代が訪れた。しかし、1982年の死刑執行停止後、彼は政治活動を再開した。そして1987年には再び大統領選挙に立候補し、盧泰愚と争って破れ、1992年には三たび金泳三と争って破れた。そしていったんは政界引退表明までしたほどだったが、不死鳥のようによみがえり、遂に1997年、金大中は大統領に当選したの

である。

このように金大中の政治活動は波乱に満ちたもので、何回も本当に生死の境目を渡り歩いてきた、筋金入りの政治家だ。そして、2003年2月24日をもって、1998年～2003年の5年間にわたる大統領の任期を全うし、金大中政権はその幕を閉じたのだ。

### <金大中の今後>

韓国の大統領は、過去みんな悲劇的な末路をたどっている。李承晩大統領は亡命を余儀なくされ、朴正熙大統領は銃弾に倒れた。そして全斗煥大統領も、盧泰愚大統領も退任後、在任中の不正で逮捕された。そして金泳三大統領は経済危機で「失政」の集中砲火を浴びた。そして今、金大中前大統領には、南北首脳会談を巡る北朝鮮への5億ドルの送金疑惑が浮上している。2月25日の新聞記事によれば、金大中は2月24日の退任の日、2月18日発生した地下鉄放火事件による大惨事の影響もあって各界代表の晩餐会を中止し、テレビを通じて、国民に最後のメッセージを送ったとのことだ。そしてその中で、彼は「数十年を亡命と軟禁、監視の中で生きてきた。多くの恥辱、苦痛、誘惑もあった。しかし、不義への妥協は永遠に死ぬことと思ひ、妥協を拒否した」と振り返り、「歴史を信じたからだ」と述べた、と伝えられている。

イラク問題と並んで北朝鮮の核開発問題が国際問題として大きく浮上している今、日本にとっても、韓国という国、そして韓国の大統領がどういう人物なのかについては、もっとも興味を持つべきテーマであることをあらためて認識すべきである。2月25日に新しく発足した盧武鉉大統領との新しい関係の構築に向けて、小泉総理をはじめ日本の政治家たちは続々とソウルを訪問しているが、これが一時的な現象であってはならない。

### <この映画の問題提起をどう受け止めるか？>

この『KT』という映画はドキュメント映画ではない。ケネディ大統領暗殺事件と同様、この金大中の暗殺拉致事件についても、その真相をすべて語れる人物などいるはずがない。つまりこの映画は、多くの資料を集め、自分の足で調査し、多くの関係者の証言を基にして作ったドラマであり、あくまで阪本順治監督が描く、「KT暗殺事件」を素材としたフィクションである。したがって、そこには歴史上表面にあらわれる人物（公人）の他、その裏にいる興味深い人物を何人も登場させている。その双璧が元自衛隊の富田満州男（佐藤浩市）と新聞記者の神川昭和（原田芳雄）だ。富田と神川は水と油ともいふべき全く正反対の人物だ。神川は金大中と直接面談し、マスコミの力を通じて、金大中暗殺事件に影響を及ぼしていく。そして富田は、①韓国の朴独裁政権を擁護し続けるアメリカ、②そのアメリカの言いなりになっている日本、③そして日陰者の存在のままの自衛隊、に対する「嫌悪感」から、1970年に突如割腹自殺した三島由紀夫に心酔し、金大中暗殺事件につい

て自分なりの行動をとっていくことになった。そして、この途は結局、KCIAによる金大中の拉致・暗殺事件に協力することになったため、富田の行く末には大きな危機が迫ることになった。

さらに、脇役ながら興味深い2人の人物がいる。その1人は在日2世の若者、金甲寿（キム・ガプス）（筒井道隆）だ。柔道3段の彼は金大中のボディガードとなったことにより、否応なくこの事件に巻き込まれることになる。もう1人は韓国人女性李政美（イ・ジョンミ）（ヤン・ウニョン）。彼女は韓国の民主化デモに参加し、1972年10月17日、非常戒厳令下でKCIAに連行、投獄され、ひどい拷問を受け、身体に大きなキズを残している。今は日本で韓国語を教えながらひっそりと暮らしているが、富田と知り合い、複雑な関係ながら心をひかれ合う仲となる。

このように阪本順治監督はさまざまな興味深い人物を登場させて配置し、手際よく、かつスリリングに「KT拉致・暗殺事件」を描いていく。多少現実ばなれした部分を感じられないこともないが、全体としては緊張感をもって鑑賞できる秀作だ。充実した2時間18分だった。

2003（平成15）年2月25日記